

文部科学省委託「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」
モデルプログラム（2017年度版）を活用した授業・研修
大学における養成 No.1

外国人児童生徒教育概論 I

検証実施機関（団体）：愛知淑徳大学
 愛知淑徳大学 文学部 教育学科 松井 千代

1 検証対象の研修・授業について（該当するものにチェックを入れてください。）

養成／研修	<input checked="" type="checkbox"/> 養成 <input type="checkbox"/> 研修
タイプ	<input checked="" type="checkbox"/> 基礎教育 <input type="checkbox"/> 専門教育 <input type="checkbox"/> 支援員教育
研修・授業日（期間）	2018年 7月 23日～ 2018年 7月 23日
総時間数	1.5時間（ 1.5 時間× 1回）
研修・授業科目名	外国人児童生徒教育概論 I
受講者	人数（ 13 人） 年齢層：大学2年生 11人 4年生 2人 外国人児童生徒等教育の経験：無 12人 支援活動有 1人 日本語指導（成人対象を含む）の経験：無

2 地域の日本語教育関係者や学校教育との関わり（大学として、あるいは教員個人で）

(1) 周辺の地域の日本語教育関係者／ボランティア等との連携など

平成28年度「日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査」によると、愛知県の外国籍児童生徒は7277人と最も多く、2位の神奈川県3947人との差も大きい。在籍校種別の人数を見ると、小学校で5049人、中学校で1959人と、本授業を受講した学生が将来目指す小・中学校教諭になった際、その多くがこれら児童生徒と関わるであろう。名古屋市のような大都市に限らず、自動車産業に関連した工場のある地域に集住する傾向がある一方、県内出身学生であっても「これまで一切外国人（児童）とのかかわりがない」と事前アンケートで答えたことからわかるように、ほとんど外国人住民が住んでいない地域もある。大学のある長久手市は外国人児童生徒数が非常に少なく、小学校に日本語指導のために取り出しなどを行う支援教室は設置されていない。

大学としては、全学的な学生ボランティア団体であるCCCが、外国人児童の放課後学習教室などを開いている県内の支援団体の要請を受けて随時ボランティア学生を募集している。本授業の受講者の1名は、この団体を通して外国人児童の放課後学習の支援を経験している。

本学所属の教員レベルの関わりとしては、日本語教育に携わる複数の教員が学生をボランティア体験（キャンプや日本語教室）に引率し活動をさせている。

授業者である筆者も、愛知県岡崎市国際交流NGO団体「Viva!おかざき」と協力し、外国人児童の日本語支援教室へゼミ学生を引率し宿題支援などを体験させている。

(2) 周辺の学校との交流や共同研究、或いは教育行政との関係など

(1)と同様に本学所属教員個人レベルの教育活動としては、複数の教員が、学校現場や教育行政主催の支援教室などで学生が外国人児童と交流する機会を設けたり、指導者として助言や講演等を行ったり、共同研究を行ったりしている。

授業者は、現在、日本語指導の必要な児童生徒に対して取り出し授業で行う日本語多読指導を研究して

おり、愛知県豊田市、知立市、大府市の小学校の協力を得て調査を行っている（科研費助成による）。また、愛知県安城市多文化共生審議会審議委員を務めており、行政と関係している。長久手市国際交流協会主催の多文化共生フェスタに、協会からの依頼を受けて、ゼミ学生とともに参加している。そこでは、日本人や外国人、外国ルーツの子どもたちに日本文化を伝える企画にとともに取り組み、様々な背景を持つ児童を学生が知る機会となっている。

(3) 日本語指導や外国人児童生徒教育等に関わる研修など

授業者は、日本語教師資格（養成講座 420 時間終了、日本語教育能力検定試験合格）を持ち、日本語学校で日本語教師として勤務をしていた。また、小中学校教員歴も長く、愛知県豊田市の小学校で日本語支援教室の担当となった経験がある。

大学としては、授業者の所属する文学部教育学科では、「外国人児童生徒教育概論Ⅰ」と「外国人児童生徒教育概論Ⅱ」という授業が開講されている。別学部等では、留学生に対する日本語や日本事情を学ぶ授業や、日本語教師養成を視野に置いた日本語教育を学ぶ授業があるが、これまで日本語指導について学ぶことのできる授業は教育学科では開講されていないと認識している。授業者は、2019 年度より上記 2 つの教育学科の授業を担当する予定で、これまでも担当した「外国人児童生徒教育概論Ⅰ」では、児童を取り巻く環境や現状、教員養成課程で知っておくべき背景知識を学んだあと、新たに担当する「外国人児童生徒教育概論Ⅱ」の授業では、外国人児童生徒に日本語を指導する具体的な方法を取り扱いたいと思っている。

3 研修・授業の成果について

(1) (受講者アンケートより)

①受講者の研修への期待（アンケートのⅠより）

自分が教員になったときに、外国人児童へどう接し、指導していけばよいかというところに関心が高い。よって、担任をした際に知っておきたい外国人児童への日本語の指導方法や、進路を相談されたときに知っておきたい情報などについて考えている学生が多かった。

②受講者の研修内容の理解度・満足度（アンケートのⅢ①より）

この質問の答え方が、「期待していたことと授業内容が一致していたか」ということであったので、本人が予想していたことと違くと答えた学生が 2 名いた。しかしながら 2 名とも、「予想とは違ったが、勉強になり良かった」との意見であり問題はなかった。したがって、この授業の満足度に関しては、ほぼ全員が設定された項目に対して「5 非常に参考になった」、「4 参考になった」とつけており、内容に対する満足の高さを表す結果となった。

③関心を高め、教育力の向上を促したと考えられる内容・活動（受講者アンケートⅢ②の回答より）

どの教室でも起こりうる事例に対して、その問題点と解決方法を周囲の学生と議論しながら見出すことに大変意義を感じていたようである。みなが問題を抱えた児童の具体的なイメージを持ち、電話でお母さんにどう話すか、その子供にどんな声かけをするかなどを真剣に語り合うことができた。

④受講者が今後望む研修・授業の内容と活動（受講者アンケートⅣより）

この授業の狙い通り、異文化理解、文化の違いを知るなど答えた学生が最も多かった。この授業により異文化を踏まえた児童理解への関心がさらに高まったと考えられる。次いで、期待していたことにも多くあった子どもたちの就学や進路、そしてこの授業の直前に学習した AU カード等を用

いた教室での指導法についてと書かれていた。

現場に出た時に生かせることと直結した学びを希望していることが分かった。

(2) 研修企画の立場から見た、研修の成果と課題（企画者アンケートⅢの回答より）

どの学生も自分が現場で教員になったときに、外国人児童生徒の教育に携わる準備ができたと考えられる授業となった。この授業を始める前には、学生たちが集住地区を少し離れたところに住んでいるというだけで外国人児童生徒のことを全く知らないことが分かっていた。今回の授業にモデルプランを利用しシラバスを再構成したが、具体的な例から異文化理解という広い捉え方ができる学生が多く、この授業の成果を感じる事ができた。

4. モデルプログラムについて

(1) 養成・研修内容構成（報告書 pp. 72-76）について（意見）

必要なことが網羅されており十分な内容だと考える。

十分な内容であると思う一方、「外国人児童生徒等の心身の発達と学習の過程」を例にすると、言語習得の「知識」の部分がいささかクローズアップされすぎている気がし、実際に現場で必要とされる「実践」の部分が少なく感じた。例えば「授業実践力」や「教師としての成長」の項目では何を研修すべきなのか考えるのが難しいと思った。

(2) モデルプログラム（報告書 pp. 207-244）について（意見）

60-90分程度のモチーフ型のプログラムは、選択・組み合わせがしやすかった。

今回の授業の場合、もともと組まれていたシラバスの内容とモデルプログラムがほとんど同じ内容と流れであったので、実施カリキュラム作成時に、その授業の目標設定の参考になった。

他のモデルプログラムについて、教室での日本語指導の実際について興味を持っている学生も多かったことから⑩⑪の検討も同時に行ったのだが、指導法の種類（コミュニケーションアプローチ、タスクなど）の知識注入型となっているため、今回の授業では取り扱わなかった経緯がある。「理論と方法」の「方法」の部分がより実践的であることが望ましいと思われる。

(3) モデルプログラムの活用で研修の運営が円滑になったか。

今回の授業は、もともとのシラバスの内容とモデルプログラム例がほとんど同じ内容であったためすぐに組み立てることができた。そして、プログラム例があったことで、それまで考えていた流れの修正や、研修時の先生方からのアドバイスで新しいアイデアを生むことができた。また、同じ内容であっても、それまで考えていた指導案とは、プラン例を見ることで、要所所での活動のポイントを押さえや、最後のまとめでの落としどころが明確になった。

(4) モデルプログラムの活用を通して、研修・養成で、どのような力を高めてほしい

か。あるいは、高めるためには、どのような活用の仕方が必要だと思うか。

養成の段階であっても、卒業後すぐに教員として児童生徒に関わる学生たちには、外国人児童支援に対する知っておくべき知識に加え、少しでも実践がプラスされるような研修（授業）を行っていきたいと思う。そのために、企画したり教えたりする側が、モデルプログラムを見て研修や授業で内容のバランスを考えたり、系統立てて研修やシラバスが組めたりするようできるものであってほしいと思う。次のシラバス作成の際には大いに活用したい。

追跡アンケートについて

モデルプランを利用した授業は前期に開講されていたため、夏休み後の以前受講していた学生とは接点が少なくなりました。キャンパスの通信により呼びかけに応じた学生のみでの回答となり、回収は受講者13人中7名となりました。

アンケート結果)

II 授業を受けて「①この授業で学んだことで今でも印象に残っていること」について

- ・外国人児童が思ったよりもたくさんいることとその実態を見たり聞いたりしたこと。
- ・日本語だと省略しても伝わる言葉であるのに、言い換えたり説明したりするのが外国の子どもには難しいと感じたこと。
- ・母国語が話せない外国人児童がいるということ。みんな日本語と同じように話せると思っていた。
- ・自分の母語中国語を学校では話さないと言った小学生の子の話。アイデンティティの問題は生きていくうえで最も重要なものでただ日本語を教えるだけでなく、母国語や文化を大切にしていかなければならないと感じました。
- ・日本語をひたすら詰め込むとかではなく、母語や母語の文化に触れさせながら行った方がいいということ。

「②授業後の行動、活動」

2. 関連のある Web サイトにアクセスした	6
4. 住んでいる地域の外国人児童生徒について調べた	4
1. 関する本を読んだ	1
3. 施策について調べた	1
6. 多言語対応について調べた	1
7. 母語について調べた	1

「③自分の考えで変わったと思うこと」

- ・将来自分が教員になったとき、外国人児童がいた場合、どのように接したらよいかを学ぶことができたため、生かしたいと思った。
- ・自分では想像できないような不便さを児童たちがしていることが知ることができたし、日本だけでなく、母国も大切にしなければいけないということを知ることができたので、外国人の家族を見かけたとき、困っていたら何かお手伝いできることはないかという視点で意識するようになった。
- ・将来自分が教師になった際に、外国人児童が自分のクラスにいたときにきちんとその児童をみて、文化の違いなど理解した対応をしたいと思います。
- ・自分が親の都合で外国に行くことになったとき、日本の教育のような支援の仕方で安心して過ごせるかどうか考えるようになった。
- ・インターナショナルスクールに通う子供や、両親が日本字だけれど外国に住んでいた子など、日本語に触れる機会が少ない児童生徒の事情が様々あると思います。今まで以上に対応が複雑になるからその子たちについて勉強しなければならないと感じます。外国人の子どもたちの苦労や家族の苦労がわかるようになったので、その子たちのサポートができればいいなと思うようになりました。
- ・外国人児童の指導には親の理解と協力が必要不可欠であることが分かった。いろいろな背景の子どもたちがいることを理解したうえで対応していくことが大切だと考えるようになった。

「④-1 将来の職業」 全員「学校教員」と回答

「④－２ この授業で学んだことをどのように活かせるか」

- ・外国人児童の担任になったときに適切に対応するために活かせる。また、担任にならなくても、学校全体で外国人児童を支えるための手立てを考えるために活かせる
- ・周りの教員志望の子たちにも学んだことを伝えることで、学校で外国人の子どもたちが配慮されるようになり、学校生活が楽しくなると思う。
- ・担任になったときに日本語担当の教師との連携を上手に図ることができると思う。
- ・子供たちはだれでも一人ひとりをちゃんと見ることを学んだのでそのようにしたい。
- ・自分の担任するクラスに外国人児童がいた場合に、日本で生活するうえで不便なことの想像がつくので、その児童の家族も含めて何かしらの手伝いができると思う。また、学級に居場所が作れるように、授業で行ったゲームなどを参考にして、親睦を深めるきっかけを作れると思う。
- ・どんな仕事についても外国の人が増えてきている日本では、説明や指導が必要になってくると思うため、自分が相手の立場だったらどうされたいのかを考えて接していきたい。
- ・接し方や個別対応について、大切なことをいかしたい。

追跡アンケート結果の感想

授業のあとにほとんどの学生が、関連のあるサイトにアクセスし、地域のことを調べたり本を読んだりしていたことについて大変喜ばしく感じた。大学生が授業のある一科目で学んだことに関心を持ち続けてくれていることについて、少々の驚きとともに、教育現場の現状では外国人児童について無関心ではいけないという問題意識をもってくれたのだと改めて思った。このモデルプランを生かした授業内で議論したことを、自分の将来に活かそうとしているのが結果からも分かり、学生の学びたいことと授業の内容が合致していたのであろうと感じられた。